

柳文卿・陳玉爾事件とアムネスティ・ インターナショナル日本の設立 ——日本における台湾独立運動をめぐる一断面

前 田 直 樹

はじめに

アムネスティ・インターナショナル (Amnesty International、以下 A I と略記) 日本支部の初代理事長は、社会派・人権派弁護士として戦前から活動し、戦後は日本社会党代議士を 8 期務めた猪俣浩三である。猪俣は A I 日本支部設立の契機を以下のように回想している。

1969 年 9 月から 10 月にかけてヨーロッパ議会制度を視察したが、「帰路途中のワシントン空港で、エール大学教授陳隆志 (台湾出身者) の突然の出迎えを受け、アムネスティ・インターナショナルの米国支部に導かれた。そこでアムネスティの性格と趣旨を説明され、日本支部の創設を約束した。」(下線部引用者)⁽¹⁾

猪俣浩三は陳の突然の訪問を受けて、日本支部の設立を決意したという。しかし、猪俣は親中派としても知られる代議士であり、他方、名高い国際法学者である陳隆志は A I の会員であるものの、同時に当時すでに台湾独立派としても名を知られていた⁽²⁾。親中派と台湾独立派との接点は、とりわけ当

(1) 山下恒夫編著『聞書き猪俣浩三自伝——無産党弁護士の昭和史』(思想の科学社、1982 年)、336 ページ。

時の日本の政治的イデオロギー状況を考慮すれば、奇異に感じさせる。政治的立場を異にする2人が国を超えて会談した契機は何であったのか。

本小論の目的は、日本における台湾独立運動と関係の深い柳文卿事件・陳玉爾事件⁽³⁾を契機とするA I 日本支部設立の経緯を探ることで、日本で展開された政治犯釈放工作の一端を再整理することにある。

1. 柳文卿事件をめぐって

日本での台湾独立運動に参加していた柳文卿は、オーバーステイであったため、1968年3月27日午後4時過ぎに入管に出頭した。ところが、従来の入管の対応とは異なり、退去命令を受けて直ちに身柄を拘束された。早くも翌27日には、午前9時半離陸の中華航空機で台湾に強制送還された。中華航空機の出発間際には、強制送還の情報を得た台湾独立派（台湾青年独立連盟）の活動家が、柳の送還を阻止しようとして羽田空港の滑走路内に侵入し、10名が逮捕されるという、いわゆる羽田事件が起きた。柳の抵抗する様子のもとより、台湾独立派青年の拘束される様子が写真入りで新聞に掲載されたため、政治犯の強制送還は広く耳目を集めることとなった。

反中国国民党運動や台湾自由化・民主化運動は、1960年の雷震事件⁽⁴⁾の後、

-
- (2) 陳は、1967年、著名な政治学者であるハロルド・ラスウェル (Harold D. Lasswell) との共著を出版し、その中で主権未決定論の立場から台湾住民の投票に基づく自決を主張した。Chen Lung-chu (陳隆志) and Harold D. Lasswell, *Formosa, China, and the United Nations: Formosa in the World Community* (New York: St. Martin's Press, 1967).
- (3) 柳文卿事件そして陳玉爾事件とは、両人の台湾への強制送還と、一連の釈放または減刑運動を指す。柳は日本における台湾独立運動への従事、陳は米国と日本での中国寄りの言動によって、帰国すれば政治犯として処罰されることが予測可能な状況下で強制送還された。
- (4) 台湾における権威主義体制の確立と米国による台湾海峡固定化政策との関連から現代台湾史における雷震事件の意味合いを検討したものとして、前田直樹「台湾政治自由化與美國對台政策：從二二八事件到雷震案件」、中央研究院台湾史研究所編『二二八事件60週年紀年論文集』（台北市：中央研究院、2008年）、463-485ページ。

主に海外で展開されるようになり、台湾独立運動と密接な関わりを持った。戦後日本での台湾独立運動は、廖文毅の台湾共和国、史明の独立台湾会等があるが、柳文卿事件当時、もっとも活発に活動していたのは台湾青年独立連盟で、雑誌『台湾青年』の発行を通じて台湾独立を主張し、台湾での政治的弾圧の実態を訴えていた。台湾青年独立連盟は王育徳⁽⁵⁾が組織した台湾青年社が前身で、当時の主な活動メンバーは、許世楷⁽⁶⁾、宗像隆幸（宋重陽）⁽⁷⁾、黄昭堂⁽⁸⁾らであった。後に台湾青年独立連盟は、他の海外にある台湾独立運動組織と共に台湾独立建国連盟を 1970 年に結成した。

羽田事件によって黄昭堂らは逮捕されたが、許世楷は当日入管に向かっていたため、羽田事件に関わってはいなかった。そこで許が柳文卿の送還について、「人づてに、弁護士で社会党の代議士だった猪俣浩三さんを紹介してもらい、相談したところ、猪俣さんは国会で質問」⁽⁹⁾してくれることになったという。これが、日本で台湾独立運動に携わる者と親中派社会党代議士との最初の接点であった。

猪俣浩三は、戦前に人民戦線事件、ゾルゲ事件、戦後には鹿地事件（キャノン機関拉致事件）や、政治犯引き渡しに関わる尹秀吉退去取消訴訟での弁護に携わり、人権擁護派の弁護士として知られていた。また、1947 年から 1969 年までは社会党所属の衆議院議員でもあった。猪俣は、政治的には親中派であり、

(5) 1924-1985 年。戦後に日本へ亡命し、台湾独立運動に従事した。台湾語研究で名高い。

(6) 1934 年生。東京大学大学院修了。後に津田塾大学教授、台北駐日経済文化代表処代表（駐日代表）。

(7) 宋重陽は筆名。1936 年生。明治大学卒。『台湾青年』編集長。

(8) 1932-2011 年。東京大学大学院修了。後に昭和大学教授、台湾独立建国連盟主席。

(9) 盧千恵『私のなかのよき日本—台湾駐日代表夫人の回想五十年』（草思社、2007 年）、97 ページ。著者の盧千恵は許世楷夫人である。また、許によれば、初対面では許の政治的背景ゆえか、猪俣は「無愛想」な対応だったという。許世楷氏への筆者インタビュー、2011 年 5 月 9 日、台中市内の許氏自宅にて（以下、許世楷インタビュー）。

1962 年には「中国政府の個人招待をうけ、夫妻で中国各地を旅行。五月一日のメーデーには、毛沢東主席ら中国首脳部とともに天安門上で見物」⁽¹⁰⁾したほどであった。

猪俣浩三、そして社会党・民主社会党の衆参議院議員は、劉文卿事件での入国管理局（以下、入管）の対応を国会委員会で質問した。事件直後の 3 月から 4 月にかけてだけで計 7 回である。これらを通じて台湾独立運動に従事する台湾人の強制送還をめぐる日台間「密約」が次第に明らかになっていった。

猪俣浩三らの質問には、いずれも入管局長の中川進⁽¹¹⁾が答弁した。中川は、劉文卿は日本における滞在の根拠を失って不法滞在になっており、速やかに送還するのは当然の責務であるとの見解を繰り返した。しかし、不法滞在者に対する入管の従来への対応は、刑事法上の犯罪者等を除き、いわゆる仮放免にしていたのである。しかも、劉文卿の代理人から送還執行停止が求められることを承知しながらであった。中川は、3 月 26 日の「朝早く、午前八時ごろでございますか、弁護士さんから私のほうへ、これから〔執行停止命令の申請を〕提起するという通知がございましたので、提起されたと思いましたが、正式に知りましたのは、役所へ参りまして、本人が飛行機で立ったあとでございます、午前十時二十分に私のほうに通知がございました。」と、送還の執行停止命令が出されるであろうことを承知しつつも、あくまでも間に合わなかったからであると述べた⁽¹²⁾。

ところが、台湾側の史料では、劉文卿を 27 日に送還することが前もって、遅くとも 3 月 22 日までには、決定済であったことが示されている。3 月 22 日付の台湾外交部文書は、日本側は柳文卿を「本（三）月二十七日に我が方

(10) 山下恒夫『聞書き猪俣浩三自伝』、333 ページ。

(11) 入管は 1952 年まで外務省外局であったことから、1990 年代まで外務省出身者が局長を務めていた（「充て職」）。中川局長も外務省出身である。後に外務大臣官房審議官を経て在ユーゴスラヴィア大使。

へ引き渡すことを既に決定している」⁽¹³⁾と伝えており、入管は裁判所の「介入」を回避して 27 日に送還しなければならなかったこと、言い換えれば、日台間で前もって劉文卿の送還で合意のあったことを表している。

このような政治犯の引き渡しに関わる日台間「密約」は、実は 1967 年 10 月 3 日から当時の法務大臣、田中伊三次と中川入管局長が訪台した中で結ばれたものであった。当時、麻薬密輸等によって収容されている台湾人は二百数十名にのぼったが、台湾は長きにわたって引き取りを拒否していた⁽¹⁴⁾。猪俣浩三は、これらを台湾側が引き取る代わりに柳文卿ら台湾独立派を日本側は送還すると約束したのではないかと、中川を糾した。中川は、「そういうような約束をした覚えは全然ございません」と答弁しつつも、「誠意を示す意味で、私どものほうから、オーバーステイになっている中国人がたくさんおるから、台湾に引き取っていただきたい、ぜひこの引き取りについて考えてもらいたいということを申したことはございます」と述べた⁽¹⁵⁾。これは、猪俣が述べるように、台湾独立派を「一人引き取るごとに [オーバーステイの] 三十人という約束」に等しいものであった⁽¹⁶⁾。許世楷によれば、送還する台湾独立派の取引人数は 6 人で、1 人目が柳文卿、2 人目は許だったという⁽¹⁷⁾。

(12) 『第五十八回国会参議院予算委員会議録』第十三号 (1968 年 4 月 4 日)。なお、岡沢完治 (民主社会党所属衆議院議員) は、柳文卿の代理人ではなく、裁判所が連絡を行ったと語っている。「三月二十七日の午前八時ごろに地裁の民事二部の受付係から入管のほうに電話をさせてもらって、本件は審査中であるから送還の執行を見合わせるようということも要望しておる。」『第五十八国会衆議院法務委員会議録』第二十六号 (1968 年 4 月 26 日)。

(13) 外交部亜東太平洋司「為遣返偽台獨份子柳文卿事」、1968 年 3 月 22 日、外交部檔案、「偽台獨份子柳文卿」、006.3/0029、台北市：中央研究院近代史研究所檔案館所藏 (以下、近史所檔案館)。

(14) 入管ないし法務省の国会答弁では人数は一定しないものの、最低 218 人いたことが明らかにされている。

さらに、猪俣浩三らが劉文卿の台湾送還後の安全について問うたところ、中川入管局長は台湾側から保障を得たので送還したと答弁した。その保障とは、台湾の駐日大使館による入国管理局長をあて名にした覚書（2月7日付）と、陳之邁駐日大使からの身体自由に関する口頭保障であった。駐日大使館

(15) 猪俣の質問と中川の回答の概略は以下の通り。

猪俣「ここにいらっしゃる田中さんが法務大臣時分に、あなたと一緒に台湾へ渡って、台湾政府と何か相談してきた。それは、どうも日本に台湾人でアヘン密輸をやるような人間が相当たくさんつかまって大村収容所に入れられているが、台湾政府はこれを引き取らぬ。そこで、それを引き取るという交換条件で、そのかわり台湾独立運動なんかやっている人間は帰そうじゃないかという、何か話をして帰ってきた。」

中川「台湾人の法的地位の改善について考慮してもらいたいという要求がなされました。その点について話をしたことは、事実でございます。そのときにおきまして、私どもといたしましては、まあ交換条件というわけではございませんが、とにかく台湾人の法的地位の改善ということについて、もちろんわれわれとしては検討はしてみたいが、結論としてははなはだむずかしいと思われる。しかし、とにかく誠意を示す意味で、私どものほうから、オーバーステイになっている中国人がたくさんおるから、台湾に引き取っていただきたい、ぜひこの引き取りについて考えてもらいたいということをお願いしたことはございます。しかし、ただいま御指摘のごとく、台湾の独立運動をやっておる者を帰す——先ほど交換ということをしたしか先生おっしゃったかと思いますが、そういうような約束をした覚えは全然ございません。」『第五十八国会衆議院法務委員会議録』第二十三号（1968年4月19日）。

(16) 猪俣の発言は以下の通り。

「柳君と同じような立場の人が四十人もあるのですがね、これらを一体——こういう送還をしたのは二人で、アヘン密輸業者六十人引き取ってもらったそうですから、一人引き取るごとに三十人という約束をなさったということだが、ほんとうだと思う。ちょうどいまそういうことになる。二人に対して六十人引き取った。そういう取引に使われるというようなことも、これ私は非常な問題だと思うのですね。それはそういうことをやったとおっしゃるまいから、これ以上言いませんが、ちょうど比率は、そうになると二人強制送還して六十人引き取ってもった、こういう一対三十ということはほんとうの話だといま思うわけです。」『第五十八国会衆議院法務委員会議録』第二十六号（1968年4月26日）。

(17) 許世楷インタビュー。

の覚書は、「台湾独立運動等の政治活動をなした者に対し、過去の如何を問わず処罰しないという寛大な精神を執っている」⁽¹⁸⁾と述べたものであった。そのうえで、中川は、柳文卿が身体への危険なく台湾に帰った証として、台湾到着後に「両親と一緒にとった写真まで私ども入手しております」とまで述べた (4 月 4 日)⁽¹⁹⁾。

これら入管の提示する保障について、猪俣浩三は、4 月 19 日、「飛行場へみな家族が出迎える写真なんかを見せておる」、「日本にこういう一札 [大使館覚書を指す] を出した手前、そういう芝居をやったのかもしれぬ」との疑問を呈した⁽²⁰⁾。

まさに、この柳文卿の写真は「芝居」であり、実は入管が要請して撮影されたものであった。入管は、柳の送還決定が台北に伝えられた 3 月 22 日、駐日大使館に対して、「外交部が方法を講じて柳の家族あるいは親友を二十七日正午に出迎えさせ、写真をとって速やかに大使館から当該局に渡し利用できる」ように求めていたのである。「偽台湾青年分子 [ママ] を調査強制送還することは初めてのことであるため、入管は相当に不安を感じている」⁽²¹⁾からであった。このため、写真や覚書を提示することで日本国内からの批判に対

(18) 川田泰代『良心の因人—陳玉璽小伝』(亜紀書房、1972 年)、38 - 39 ページ。

(19) 『第五十八回国会参議院予算委員会議録』第十三号 (1968 年 4 月 4 日)。中川が保障文書と写真に初めて言及した箇所は以下の通り。

「ことしの二月の七日付で大使館から私どもの入管局にあてまして、こういう台湾独立とか何とか、そういう政治活動をやっておった者を本国に帰しても処罰はしないということを公文書で確約しております。それから越えて三月五日の日には陳大使が [中略] 絶対にそういう者をいじめたりすることはない、生命身体の自由を侵されることはないということを話しております。」「それから問題の柳という三月二十七日に送りました人も、その日にさっそく飛行場で家族、すなわち両親に引き渡されまして、両親と一緒にとった写真まで私ども入手しております。」

(20) 『第五十八国会衆議院法務委員会議録』第二十三号 (1968 年 4 月 19 日)。

(21) 駐日大使館から外交部あて公電、密急、1968 年 3 月 22 日、外交部 檔案、「偽台獨份子柳文卿」、006.3/0029、近史所档案馆。

処しようとしたのであった。このような入管の態度は、陳玉爾事件によってますます明瞭になっていった。

2. 陳玉爾事件から A I 設立へ

猪俣浩三らが国会で柳文卿事件の入管処理を追求していた頃、同じように台湾へ強制送還された別の事案、陳玉爾事件が明るみに出た。陳は、先の大使館覚書の出された翌日の2月8日に入管に出向いたところ、オーバーステイで拘束され、9日の午前に台湾へ送還されたのである⁽²²⁾。出頭日に拘束され翌日には強制送還された点で、柳文卿の送還と全く同じであった。ただ、陳は柳と同じく政治的信条が問題とされた台湾出身者であったものの、台湾独立派ではなく、むしろ政治的には親中派の人物であった。

陳玉爾は、ハワイ大学大学院で学んでいたが、その間の親中国的言動が問題となり、米国ビザの延長を拒否され、また台湾に戻ることもできなくなった。このため、日本に渡り、人づてにジャーナリスト、川田泰代を頼った。川田は、親中派のジャーナリストであり、その中国関連の人脈を駆使して陳を保護した。陳は、「東京華僑総会の副会長呉普文氏のところへ行って、大陸に行きたいということを訴え」、「その副会長の紹介によって『大字報』という新聞で働」くようになり、『大字報』紙上に「東方紅曲技団の毛沢東思想による革命的感情はすばらしい」と題する文章等を書いていたという⁽²³⁾。

川田泰代は、陳玉爾が送還された直後、関係者から陳は自由意思で帰国したとの連絡を受けたのみで、その消息を知るすべはなかった。川田は陳の自由意思での帰国を疑っていたが、4月12日になって陳の父親からの手紙を受け取ったことで、陳が台湾に強制送還されたのち、台湾警備総司令部に収

(22) 宗像は、陳は2月8日に送還されたと記している。宗像隆幸『台湾独立運動私記』、175 ページ。

(23) 川田泰代『良心の囚人』、121 ページ。

監され、軍事裁判所での審理を待っていることをようやく知った。

ところが、川田が日中友好協会（正統）に支援を求めても、常任理事から「在日中国人の団体にきいたら、陳玉爾は台湾人だから、中国人ではないといったよ。だから、手伝うわけにはいかない」⁽²⁴⁾と言われるなど、従来の親中派の人脈では何らの進展も望めなかった。そこで、「ほんとうに孤立しながら、どこへ訴えに行ってもいいものか迷いに迷っていたのです。国会の法務委員会で訴えてもらうことが一ばんいいと思い、猪俣浩三先生におねがい」⁽²⁵⁾することになったという。

この川田泰代の訴えから、猪俣浩三は、4 月 19 日、衆議院法務委員会で柳文卿事件の追求に続けて陳玉爾についての質問を初めて行った。答弁に立った中川入管局長は、「ただいまの陳玉璽の件は、実はただいま先生から初めて伺って、全然存じませんので、さっそく調査させていただきたいと思います」⁽²⁶⁾と述べた。

しかし、これまた柳文卿同様に、入管当局は台湾側との交渉を経て陳玉爾を送還していたのである。外交部史料では、2 か月も前の 2 月 3 日の時点で、陳を「日本側は我が方に送還して引き渡す意向であり、大使館は日本側と折衝中である」ことが明らかにされている⁽²⁷⁾。さらに、駐日大使館による覚書が入管へ手交された翌日（2 月 8 日）には、大使館から台北の外交部に対し

(24) 川田泰代『良心の囚人』、78 ページ。許世楷によれば、陳は中国渡航を中国筋に拒否され、また日本から台湾に対して陳についての照会が行われたという。許世楷インタビュー。また、管見のかぎりでは、外交部が東京在住の陳玉爾を送還目標にした直接の契機は国民党からの外交部への問い合わせであったようである。中国国民党中央委員会第三委員会から外交部あて、1967 年 10 月 5 日、外交部 檔案、「陳玉爾」、007.1/89001、近史所檔案館。

(25) 川田泰代『良心の囚人』、123 ページ。

(26) 『第五十八国会衆議院法務委員会議録』第二十三号（1968 年 4 月 19 日）。

(27) 外交部から駐日大使館あて公電、機密、1968 年 2 月 3 日、外交部 檔案、「陳玉爾」、007.1/89001、近史所檔案館。

て、「日本側と話がまとまり、陳を台湾へ送り返す。九日午前九時半に中華航空機に搭乗」⁽²⁸⁾と、明確に報告されているのである。

この陳玉爾事件の過程で、川田泰代は知人を介して宗像隆幸と会い、協力を仰いだ。台湾青年独立連盟は、「蔣政権はわれわれを中国共産党の手先と非難していた」ため、台湾当局に口実を与えないように日本人である宗像が表に立って支援することになった。また、アムネスティ米国支部が陳の救援活動を展開したことによって、宗像はアムネスティの存在を知ることになった⁽²⁹⁾。一方、川田は、陳玉爾や陳の学んでいたハワイ大学関係者らを中心にして「陳玉爾を守る会」を結成し、さらにはベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）を巻き込んで⁽³⁰⁾、記者会見等の形で陳の救援活動に取り組んだ。この「台湾青年を守る会」、「陳玉爾を守る会」がきっかけとなり、これらへの参加者の一部がA I 日本支部の初代理事を務めることになる。すなわち、A I 日本支部設立の発起人がここでほぼ出揃うこととなった。

ほぼ時を同じくして、宗像隆幸はA I 日本支部の設立を構想した。なぜならば、宗像は、彭明敏⁽³¹⁾から「日本に『台湾の政治犯を救う会』というような組織をつくれないかと相談されたとき、私が考えたのは、アムネスティ・

(28) 駐日大使館から外交部、1968年2月8日、秘急特、外交部 檔案、「陳玉爾」、007.1/89001、近史所檔案館。

(29) 宗像隆幸『台湾独立運動私記』、177-178 ページ。宗像はA I を知った経緯として陳玉爾事件のみに言及しているが、A I は柳文卿事件でも行動を起こしている。駐米大使館から外交部あて公電、「美國國際赦免組織函詢柳文卿情形」、1968年8月16日、外交部 檔案、「偽台獨份子柳文卿」、006.3/0029、近史所檔案館。

(30) 川田泰代「台湾青年の強制送還—反戦と変革に関する国際会議（1968年8月11～13日、京都・国立国際会議場）での発言—」（『旧「ベ平連」運動の情報ページ』、URL: www.jca.apc.org/beheiren/KawadaYasuyo-Chingyokuji-jiken.htm）、アクセス日：2014年9月1日。小田実・鶴見俊輔編『反戦と変革』（学芸書房、1968年）からの再録。

(31) 元台湾大学教授。「台湾自救運動宣言」を発表し逮捕されたが、A I をはじめとする海外からの批判で釈放され、当局の監視下にあった。1970年1月に密かに出国した。後に帰国し民主進歩党から総統選挙に出馬した。

インターナショナルの日本支部を設立することであった。ちょうど陳玉爾事件で、アムネスティという国際的な政治犯救援組織の存在を知ったばかりだったからである」。さらに、日本支部の「中心になる人物」を探している時、猪俣浩三が次の総選挙には出馬せず、議員引退後は人権問題に専念するとの意向を伝え聞き、「まさにはまり役であると思った」と言う⁽³²⁾。そこで、宗像は猪俣の訪米を利用して陳隆志との面会を設定したのであった。陳は台湾独立派であるばかりか、許世楷と縁戚関係にあった（陳隆志夫人は許世楷夫人盧千恵の妹）。このようにして猪俣と陳隆志との対面がなされたのであった。

これ以降、A I の日本支部設立の動きが進んだ。猪俣浩三、川田泰代、宗像隆幸は打ち合わせの上で 1970 年 1 月 19 日、支部設立の発起人会を開催した。4 月 23 日には正式に A I 日本支部が発足した。この流れの中で許世楷は、川田を通じて猪俣に呼ばれ、日本支部に関わることになった⁽³³⁾。

A I 日本支部の設立直後に用意されたパンフレット『アムネスティ国際委員会日本支部』（発行日記述なし）によれば、初代理事は、猪俣浩三、許世楷、宗像隆幸、川田泰代を除くと、次の通りであった。

- | | |
|------|--------------------------------------------------|
| 中村哲 | 法政大学総長、後に日本社会党所属参議院議員。「陳玉爾を守る会」世話人。 |
| 中村敦夫 | 俳優。「陳玉爾を守る会」世話人。 |
| 宮崎繁樹 | 明治大学教授、後に明治大学総長。「台湾青年を守る会」 ⁽³⁴⁾ メンバー。 |
| 鶴見良行 | 評論家。 |

(32) 宗像隆幸『台湾独立運動私記』、243 ページ。

(33) 許世楷インタビュー。

(34) 柳文卿事件の際に結成されたもので、宮崎の他、阿川弘之や平林たい子、大宅壮一らが参加していた。

- 石野久夫　　日本社会党所属衆議院議員。
穂積七郎　　日本社会党所属衆議院議員。
小沢正元　　日中友好協会事務局長。
白西紳一郎　日本国際貿易促進協会⁽³⁵⁾事務局、後に日中協会理事長。
渡辺道子　　弁護士、後に日本YWCA理事長。
西田公一　　弁護士、後に第二東京弁護士会会長。

彼らは、当時は「左派と見られた日本人」（許世楷）⁽³⁶⁾であり、社会党関係者や親中派が半数以上を占めていた。

結びかえて

柳文卿事件、そして陳玉爾事件は、A I 日本支部による台湾政治犯の釈放・軽減運動に道を開いたばかりではなかった。日本の法学界、さらには一般世論に対して、政治犯引き渡しと人権擁護全般についての課題を投げかける嚆矢となった。しかも、日本政府をして入管政策の厳格化の必要性を認識させるものとなった。法務省と入管は、強制送還決定後に裁判所が「介入」して執行停止命令を受けるのを回避すべく、1969年前後に出入国管理法の改正を試みたが、猪俣浩三らの反対のみならず、広範な疑問の表明を受けて断念することになった。これはあくまでも先送りであり、日本の入管政策の改善や政治犯保護制度の確立、ひいては人権保障の制度的拡大は、引き続き大きな課題として残ることになった。

猪俣浩三は、自らの年譜の中で「アムネスティ日本支部は正式に発足。[中略] 理事は、中村哲、鶴見良行、宮崎繁樹、穂積七郎、西田公一ら。」⁽³⁷⁾

(35) 日中間の貿易・経済交流促進を目的として1954年に創設された団体である。

(36) 許世楷インタビュー。

(37) 山下恒夫『聞書き猪俣浩三自伝』、336ページ。

と記し、日本支部設立に尽力した許世楷や宗像隆幸の名前を記していない。なぜなら、正式設立にあたって先のパンフレット『アムネスティ国際委員会日本支部』を関係者とマスコミに配布したところ、いわゆる左派から「抗議」を受けたからである。それは、猪俣がパンフレットの「日本支部設立について」の中で陳隆志との面会に言及し、しかも理事に許世楷と宗像隆幸が加わっていたためであった。さらに、理事の社会党議員らは、許と宗像を理事から外すように要望してきたという⁽³⁸⁾。結局、猪俣と許らは相談の上で、配布済のパンフレットと余ったパンフレットから許世楷と宗像隆幸の名前を「黒く塗りつぶした」⁽³⁹⁾という。台湾独立派との関係を少なくとも表面上はなかったことにしようとしたのである。

しかしながら、これらによっても台湾独立派と A I 日本支部との関係は消え去りはしなかった。許世楷ら台湾独立派は、当初の目的通り、A I を通じた政治犯の釈放・減刑に取り組んでいった。それらは主として、台湾の政治犯リストを作成し、彼らの置かれている状況を取りまとめ、これら文書を密かに日本へ持ち出してロンドンの A I 本部へ送付することであった⁽⁴⁰⁾。また時には、雑誌『台湾青年』にも掲載された。むろん、このような活動は限られたものであった。しかし、政治犯が何ら公開されることなく判決を受け、刑を執行される状況下において、その実態を明らかにすることで海外社会の耳目を集めて、一定程度の牽制力を台湾当局に与えたと言えることができる。

(38) 宗像隆幸『台湾独立運動私記—三十五年の夢』(文芸春秋社、1996 年)、245-246 ページ。

(39) 許世楷インタビュー。

(40) 1970 年代の A I 日本支部の活動は特に関西地区で活発であった。その中心に位置したのが A I 日本支部の副理事長を務めた川久保公夫(当時大阪市立大学教授、後に大阪経済法科大学学長)であった。彼の元で A I 関西グループはアジアの政治犯の釈放運動に取り組み、同時に東京在住の台湾独立派(主に台湾青年独立連盟)と連携しながら台湾の政治犯の釈放・減刑に積極的に関与した。この活動内容は以下に詳しい。

Lynn Miles, "Into the Big Wide Open," Linda Gail Arrigo and Lynn Miles, *A Borrowed Voice: Taiwan Human Rights through International Networks, 1960-1980* (Taipei: Social Empowerment Alliance, 2008), even page of pp. 96-170.

台湾政治犯の釈放・減刑に取り組んだA I 関係者は、台湾在住の協力者が作成した政治犯名簿をスパイ映画さながらに密かに台湾外へ持ち出し、ロンドンのA I 本部等へ送付した。三宅清子（陳孟和訳）「我能為他們做什麼」、李禎祥等編撰『人權之路：台灣人權民主回顧』（台北市：玉山社、2002 年）、152-154 ページ。Winston Luo, "The Quiet Constancy of Miyake Kiyoko," Arrigo and Miles, *A Borrowed Voice*, odd page of pp. 113-117.

名簿を入手して政治犯の特定が可能となったA I は、国民党当局へ釈放・減刑を働きかけた。むろん、個人を特定しての照会に対して、国民党当局は拘束や服役の事実を否定できなかった。